

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月5日(水)
部 会 名	小学校 社会部会

研究主題

『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』
(含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実)

テーマ

『合意形成を通して社会参画へ向かう政治学習』

提案概要

6年生社会科の単元である「我が国の政治の働き」の学習を通して、社会の課題を自分ごととして捉えることを中核に置き、合意形成と社会参画の力を児童につけていくために単元構成を考えた。

単元前半においては知識を得るための学習。後半では学校生活の課題を見出し解決していく活動を取り入れ、知識と実社会を往還する単元構成を取り入れた。

学校生活の課題において、児童は自分のための課題から学校全体の課題へと考えが深まり、「宿題について」が解決すべき課題として決まった。合意形成の力をつけるために、宿題の量や出し方だけでなく、宿題の意義や取り組む側の意欲向上の必要性などについて、パネルディスカッションや話し合いを通して考えを深めながらクラス全体の合意形成を行った。

単元の最後には、自分たちがまとめた意見が、これから学校の宿題の在り方として取り入れてもらうことができるかを、校長先生にプレゼンした。受け入れられた部分、受け入れられなかった部分のどちらも自分が自分たちだけでなく、全体のことを考えるきっかけとなり、児童の深い学びへとつながった。

質疑応答

- Q、宿題を無くすという意見はパネルディスカッション時には出たのか、詳しい内容を聞きたい。
- A、前段階で宿題の意義について調べたり、クラスで考えたりしたこともあり、多くの児童はどのように宿題を行えばいいかという視点で話すことができていた。
- Q、パネルディスカッションにおいてとても明瞭に話していたので準備はしていたのか。また、子どもたちの宿題の取り組みは変わったのか。
- A、パネルの準備のみで、発表練習や質問への対応などは特別に時間をとっていない。年度当初から話し合う時間を様々な場面で設けていたことで力がついて面があると思う。宿題の取り組みは中学校への進学も含めて計画的に行うことができるようになった。また、担任の丸付けへの配慮など、視野が広がったように感じた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱は「知識と実社会を往還させる社会科授業」として、公民的分野に限らず様々な社会科の単元において、参加者が自分たちの実践を踏まえて話し合った。話し合いで挙げた主な内容は以下のとおり。

宿題という身近な実社会の一部を学校で学ぶ知識と結びつけて学習を進めたことは興味深く、様々な場面で応用ができそうだと感じた。

本研究発表において、単元構成は教科横断的に行われる学習であり、総合的な学習の時間や学級活動などの時間も使いながら行うものであった。そのため、教科担任制である中学校では実践が難しいが、小学校での実践として、実生活に関係のある課題設定が児童の主体性を引き出すものになっていた。

宿題という課題設定については、社会科の知識をつけていくものとして考えると別なものにしてもよかったのではないかと思う。社会科で取り扱うものとして、日本国憲法に立ちかえったり、公共性について考えられたりするようにしていくと、知識との往還が見られたのかもしれない。また、経験した内

容を社会科の知識として振り返るための仕掛けを単元構成の中に取り入れる必要はあったように感じた。

子どもだけでなく、様々な考え方を取り入れる必要性があり、保護者、地域の方々、市役所など様々な人たちの意見を取り入れることで、より多角的に考えられたり、実社会に即した考えを得られたりするのではないかと感じた。評価の位置付けについても、単元のどの場面で行えば良いか難しさを感じた。

まとめ概要

本研究発表は、政治の仕組みについて実体験を通して学んでいくことで、児童が合意形成と社会参画の力を身につけていくことを大切にしているものである。実際の児童の発表内容や話し合いの様子、振り返りを見ても、お互いの意見を聞き合い、より良いものとしていくことや、校長先生に実際に提案し、その可否を聞く経験などから、合意形成や社会参画について力を付けることができているといえる。

将来の予測が難しく、多様性にどのように対応していくかが難しい現代において、AIではなく生身の人間である教師が児童にどのような授業をしていくかが問われている。本研究発表では、民主主義の根幹である合意形成をより深掘りして、社会科の中で取り上げることは非常に意味のあるものである。テーマ設定についても、現実の政治的な内容では実感を持った活動にならないが、「宿題」という1番身近なテーマにしたことにより、児童は自分たちで課題を解決していく実感を持って取り組むことができていた。このような活動が広い意味で公民的資質の成長につながっていくと考える。

知識の往還については課題が残るものの、公民的資質を感覚的に学んでいくことが、今後の実社会で生かされていくはずであり、今回の授業のような経験が今後の教育において大切になっていくだろう。そしてなにより、児童同士のつながりや、児童と教師の関係性が日々の学習の中で形成されていたからこそ今回のような話し合いができていたように感じられた。教室を小さな社会と考えた時、児童がその小さな社会の中で生き生きと発言し、自分たちのことについて真剣に考えられたことは、児童の将来にとって有意義な経験となったといえるだろう。